木の祭り

新美南吉

青空文庫

木に白い美しい花がいっぱいさきました。木は自分のすがたがこんなに美しくなったので、うれしくてたまりません。けれどだれひとり、「美しいなあ」とほめてくれるものがないのでつまらないと思いました。木はめったに人のとおらない緑の野原のまんなかにぽつんと立っていたのであります。

やわらかな風が木のすぐそばをとおって流れていきました。その風に木の花のにおいがふんわりのっていきました。においは小川をわたって麦畑をこえて、崖(がけ)っぷちをすべりおりて流れていきました。そしてとうとうちょうちょうがたくさんいるじゃがいも畑まで、流れてきました。

「おや」とじゃがいもの葉の上にとまっていた一ぴきのちょうが鼻(はな)をうごかしていいました。「なんてよいにおいでしょう、ああうっとりしてしまう。」

「どこかで花がさいたのですね。」と、別(べつ)の葉にとまっていたちょうがいいました。「きっと原っぱのまんなかのあの木に花がさいたのですよ。」

それからつぎつぎと、じゃがいも畑にいたちょうちょうは風にのってきたこころよいにおいに気がついて、「おや」「おや」といったのでありました。

ちょうちょうは花のにおいがとてもすきでしたので、こんなによいにおいがしてくるのに、それをうっちゃっておくわけにはまいりません。そこでちょうちょうたちはみんなでそうだん

をして、木のところへやっていくことにきめました。そして木のためにみんなで祭りをしてあげようということになりました。

そこではねにもようのあるいちばん大きなちょうちょうを先にして、白いのや黄色いのや、かれた木の葉みたいなのや、小さな小さなしじみみたいなのや、いろいろなちょうちょうがにおいの流れてくる方へひらひらと飛んでいきました。崖っぷちをのぼって麦畑をこえて、小川をわたって飛んでいきました。

ところが中でいちばん小さかったしじみちょうははねがあまりつよくなかったので、小川のふちで休まなければなりませんでした。しじみちょうが小川のふちの水草の葉にとまってやすんでいますと、となりの葉のうらにみたことのない虫が一ぴきうつらうつらしていることに気がつきました。

「あなたはだあれ。」としじみちょうがききました。

「ほたるです。」とその虫は眼をさまして答えました。

「原っぱのまんなかの木さんのところでお祭りがありますよ。あなたもいらっしゃい。」としじみちょうがさそいました。ほたるが、

「でも、私は夜の虫だから、みんなが仲間にしてくれないでしょう。」といいました。しじみちょうは、

「そんなことはありません。」といって、いろいろにすすめて、とうとうほたるをつれていき

ました。

なんて楽しいお祭りでしょう。ちょうちょうたちは木のまわりを大きなぼたん雪のようにとびまわって、つかれると白い花にとまり、おいしい蜜をお腹いっぱいごちそうになるのでありました。けれど光がうすくなって夕方になってしまいました。みんなは、

「もっと遊んでいたい。だけどもうじきまっ暗になるから。」とためいきをつきました。するとほたるは小川のふちへとんでいって、自分の仲間をどっさりつれてきました。一つ一つのほたるが一つ一つの花の中にとまりました。まるで小さいちょうちんが木にいっぱいともされたようなぐあいでした。そこでちょうちょうたちはたいへんよろこんで夜おそくまで遊びました。

青空文庫情報

底本：「ごんぎつね　新美南吉童話作品集1」てのり文庫、大日本図書
　1988（昭和63）年7月8日第1刷発行
底本の親本：「校定　新美南吉全集第三巻」大日本図書
　1980（昭和55）年7月31日初版第1刷発行
初出：「幼稚園と家庭　毎日のお話」育英書院
　1936（昭和11）年11月15日
入力：めいこ
校正：鈴木厚司、もりみつじゅんじ
2003年9月29日作成
2012年5月8日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

木の祭り

新美南吉

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/